

訪問日：2017.10.4 / エリア：京都

NPO法人 こどもアート

回答者

加藤 ゆみさん(NPO法人こどもアート理事長)
水野 哲雄さん(NPO法人こどもアート副理事長)

左より) 水野さん、加藤さん



活動の経緯

子どもたちにアートの経験をしてもらうことが社会に素晴らしいものを残すと経験上感じていたので、2010年に加藤が京都造形芸術大学こども芸術学科の学科長だった水野のところに訪ねて行き、社会の中で何ができるか、実験をするために始めました。

もともと京都造形芸術大学では、通信で芸術教育を始めていて、リタイアした世代、自分の人生のエピローグとして何か芸術がやりたい、という高齢者が18才の学生とは異なるモチベーションでアートに向きあっている様子に、こちらが学ばせてもらっていました。そこで、幼児教育ということにも目が向きました。人間形成の根っことして、芸術が成長や発達にどう役に立つかということを考えるために、まず大学院の研究機関として、こども芸術大学ができました。そこでは小学校に行くまでの子どもとお母さん、お父さんのためのプログラムがあります。その後、アートを通じて子どもや障害者、そして地域と関わる人材を育成しようということで、こども芸術学科が立ち上がりました。

こどもアートの活動としては、最初は地域で様々な実験をしたいと思い、検証や調査もしていました。今は海外の取組、芸術がどのように社会の中に入り込むようになっているか、興味を持ち、比較検証を行なっています。

子どもや障害のある人とのワークショップ

子どもというのは本来、心の持ち方・心性であると考えています。だから、年齢に関係なく持っているもの、人間を作っている一部です。

子どもと障害のある人たちは共通している部分があって、あるがままの生まれ持った自然性をキープしているということです。コミュニケーションは言葉に頼りがちになりますが、彼らが表現しているものも、一つの言葉というかコミュニケーションである

ことを教えてくれます。ふと、そういう見方もあるんだと大人の側に気づかせることは多いかもしれません。

ワークショップでは、基本的にこういうものを作りましょうということはしません。目標が設定されると、不出来だとか、その通りにできない、絵は描けないということに参加している子どもや障害のある人たちが感じてしまいます。そうではなくて、素材を持って行き、どうする?と問い掛けることにしています。絵が描けないなら、共同で描いてみたら、という発想です。

障害のある人たちと最初はどう付き合うか、分かりませんでした。彼らに教えてもらおうと、彼らの創作を模写することを始めました。一緒にレベルに並んでみるのが大事だと思いました。こちらは、どう反応するののかも楽しみになってきますし、むしろアイデアをもらうこともあります。

子どもにはつながる力があります。おばあちゃんやおじいちゃんに、いっただけでいいから来てと言ってワークショップに連れて行くと、子どもたちは「誰のおじいちゃん?」とか、「どっから来たん?」とか、何かしら話し掛けてきて、彼らがおたおたしたり、大人気になったりします。

このような子どもの媒介力は、誰が見ても楽しさ、満足していると分かる空気を生み出してくれます。だからこそ、子どもと遊べる時間や場所がある、それらを作れるということが、豊かさを表しているのではないかと思います。

遊びは、アートと同じものです。遊ぶためにはあくびが必要。あくびが出るというのは、退屈しているということだから、退屈すると考え始めることができます。

宿題のように決まったことだけやっていると、そのうち創ることができなくなってしまいます。その方が社会は個人個人を管理しやすくなるだろうけど、何か大事なことを忘れているなと思ったら、遊べばいいと思います。

アートを通して、「こども」の存在、おとなの内なる「こどもゴコロ」を見つめ直し、こどもと共に育む社会づくりを提案し、あそびと学びの場を作るワークショップほか、こどもアートの視点から子育て支援やまちづくり活動、調査・研究等を実施している。

〒 606-8247
京都市左京区田中東春菜町 30-3
The Site F 号室 (アトリエみ塾内)
TEL/FAX: 075-777-5140

アートを介した教育

文化・芸術・福祉はすべて、君が君であること、生きることの内実をどう高められるかに関わるものだと思います。昔はそれを教養が担っていましたが、最近は大学でも教養がなくなってきました。もはや、生きることに関わる遊びみたいなことは、芸術しかないのではないかと思います。だからこそ芸術そのものというよりも、芸術を介して何かすること、芸術を通じた教育が必要です。

学生をしばしば福祉施設に連れて行きます。職員さんに芸大の学生は福祉を専門に勉強してきた人と何が違うかと聞くと、障害のある人と一緒にケンカしている、そういうことは、私たちにはできないと言われます。

文科省が人間力ということを打ち出していますが、それはその通りで、暮らしの中で働く、暮らしに結びついた人間力が必要だと思います。

行政への提案

子どもはいい意味でも、また悪い意味でも柔らかいから、すぐ変わっていきます。学校だけ、家庭だけの環境というように閉鎖的になるのではなく、いろんな人に出会える、経験を選択できる機会を作り、そういう活動をバックアップしてほしいと思います。

多分野をアートでつなぐことを学びたいという人は潜在的にはたくさんいると思います。京都造形芸術大学を退職した教授たちだって、その後何をしているのだろうと思いますし、リタイア世代の中でも活躍したいと思っている人はいるはずです。

集まった人同士が知り合えるセミナーや、サロンの常設の場があるといいかもしれません。講座という固いイメージがあるので、カフェや話題提供など、声が掛ければ、やってみようかなと思う人はいると思います。

予算ありきではなく、つなぐというプロジェクトは市民の気持ちが大切です。やりたい!と思うことから多様なものが生まれてきます。人と人が出会う機会が必要だと思います。